

氏 名	張 淑慶 (ジャン スッキョン)		
学位の種類	博 士 (芸 術)		
学位記番号	甲第 9 号		
学位授与日	平成 18 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	みどりの痕跡と行方 ー現代美術における「みどり」の意味分析と表現の考察ー		
審査委員	主査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	近 藤 秀 實	
	副査 教 授	李 禹 煥	
	副査 神奈川県立近代美術館館長	山 梨 俊 夫	

## 内 容 の 要 旨

現代美術という領域のなかで「自然」の位置は、どのようなものになっているのだろうか。辞書的としての「自然」は、「おのずからそうになっているさま」、「あるがままのさま」、「天然のままで人為を加わらないさま」と定義されている。しかし、歴史という人間のつくった時間の流れの中では、「自然」はあるがままの状態が失われてしまったのである。私たちが生活している都市空間の中での自然のパラダイムは、とても文化的で人間的である。このように自然という存在が人間中心になってしまってから、現代美術においても実際「自然」は陳腐なテーマに転落しているのである。もはや、自然は神秘的対象や、あこがれの対象でなくなっている。それは、私たちの解釈において人間と自然との「関係」が変わったことであるとも言える。今の自然を再認識するためには、自然に対する内的かつ外的な関係への、人間の新たな視線の模索が必要である。その小さい手がかりとして、私は「みどり」を提示する。「みどり」と言っても、それがたんなる緑色を指すものではないことは言うまでもない。

本論文では、現代美術における「みどり」の意味分析とその表現の傾向について考察する。また、自分の作品に現れる「みどり」が持つ意味と、作品制作のプロセスとの関連性を求める。私はここで、みどりの色彩つまり表面上現れる視覚的な効果だけではなく、「みどり」の持つ内在的な価値に注目したい。緑色のイメージから植物の存在、生物の成長サイクル、循環のサークル、季節の移り変わり、自然の変化、時間の流れなど、総括的な意味を持つキーワードとして「みどり」を扱う。そこで生じる「みどり」のエ

エネルギーで生命力のある動きのある表現への可能性を確かめる。緑色を使って自然を表現するというより、は、「みどり」が持つ意味が自然の現象と反応し、美術の領域の中でどのように現れるのかについて模索すること。それが私自身の制作過程である。そして、有機的な関係を持つ流動的な作用で生ずる新しいみどりの空間の中で「みどり」をひとつの概念として成り立たせる。すなわち、「みどり」は現在の制作の中で最も重要なポイントになっている。

自分にとって自然とは何か、自然と自分の関係は何であるのかを模索するための一つの可能性ないし手がかりとして「みどり」を選択したうえで植物を媒介として自然という概念を表現するのが現在の私の制作の重要な流れになっている。このとき、「みどり」はただの色彩を超えて、たとえば小さくは植物を、拡張すれば自然そのものを包括するモチーフである。私にとって「みどり」とは、すべての発想の原点であり、生命の発生する場所のごときものであり、創作の根源である。そして、自然への入り口でもあり、なおかつ、自分の制作に繋がる通路である。その「みどり」の意味を伝えることが私の役割なのである。この「みどり」に含まれている、「躍動」、「拡張」、「成長」、「生命」、「自然」にかかわるさまざまな表現を視覚化するために、「みどり」の新しい空間を創っていく。さらに、欲を言えば、こうして表れる結果だけを目的とせず、その過程をも表現するのが究極の目的である。すなわち、「みどり」の表現の過程をたんに叙述するだけではなく、それが広範にして複雑な現代美術の領域の中でいかなる軌跡を描いているか、いわば「みどりの痕跡」を記述することに本論文の最終的な意義がある。

一見したところ、茫漠たる自然にたいする私的な応答でしかない私の「みどり」が、そこから一段階また開かれ、新たな空間と時間、また想念として生まれ変わる——そうした可能性に向かって積極的に仕掛けていきたい。私の制作は、つまり、「みどり」を表現の対象にすることは、現代社会の今を生きる私たちにとって、同時代の自然から本来の自然の持つ性格や意味を得る可能性を求めるための第一歩となるだろう。

それで、本論文は次のように構成される。まずは第Ⅰ章で「みどり」の語源などの一般的概念を探る。それから、第Ⅱ章では「みどり」という概念の背景にあるものとして「植物」などいくつかの例を挙げる。例えば、植物の観察から始まり、自然の中のみどりの理解、それから自然へのコンタクト、現代美術における自然の解釈を「みどり」をモチーフとして、それらがもつ関連性を幾つかのキーワード毎に、まとめるものである。そして、第Ⅲ章で具体的に植物と自然とみどりとの関わりと関連性を示す、その例となる現代美術の作品を探ることと、その各々の作品における「みどり」がいかなる意味をもっているのかについて述べる。現代美術の中での「みどり」の表現を探ることにより、同時代の他のアーティストは作品の中でどのように「みどり」を解釈し、どのように制作と関連させているかを分析する。そして、最後に第Ⅳ章では自分の作品の中で「みどり」はどのように反映させられているかを、制作の展開と関連させて提示し、分析することにより、これからの「みどり」の表現への新しい展望が開けることを望む。実際に

は現代美術の作品の中で「みどり」をじかに表現した例となる作品は数少ない。これはそのまま、現代の美術の中で「みどり」の意味を表す状況そのものであると言えるだろう。